



Iruka



Asano Toru (Nakashizuka Tohru)

## イルカ

シンガーソングライター  
IUCN親善大使

## 浅野(中静) 透

森林研究・整備機構 理事長  
森林総合研究所 所長

# 森と生きものたちと 共に暮らしたい

巻頭●対談

世界最大の自然保護ネットワークIUCN(国際自然保護連合)の親善大使として、長年にわたり地球上のあらゆる生きものたちへ、歌やトークを通してやさしいまなざしを送りつづけてきたイルカさんに、浅野(中静)透 所長と、森と生きものと人の暮らしをめぐってお話いただきました。

Studio 5th NAKAMEGURO (東京)にて  
Photo by Godo Keiko

**浅野**●森林総合研究所は、今年120周年を迎えたんです。

**イルカ**●120周年ってすごいですね！

**浅野**●内閣府の森林に関する意識アンケートによると、数十年前までは木材が重要との回答が多かったのですが、いま国民が森にいちばん期待しているのは、防災や減災、気候変動の緩和への貢献なんです。森林には木材以外にもいろいろな恵みや機能があるので、研究の幅もかなり広がったと感じています。

イルカさんも、IUCN\*の親善大使になられて20周年を迎えられたとか？

**イルカ**●はい、今年21年目です。2004年に外務省から突然連絡があつて、IUCNという自然保護団体があるんだけど親善大使にならないかと。私はWWF\*の会員だったので、IUCNのことはよく知らなくて、「なんで私？」って。でも昔から生きものことは大好きでした。大人になったら獣医さんになってジャングルの奥地で野生生物の仕事をするって幼い頃は決めてました。

**浅野**●そうでしたか！

**イルカ**●でも、気がついたら歌ってたんですけど(笑)。いつも生きものや自然の側に立って見ている自分がいて、子どもの頃はなぜ人間は自分たちがいちばん偉いって言うのかよくわからなかった。「大人になればわかる」と言われたけど、大人になってもわからなかった(笑)。環境汚染が広がったり、生きものが減っていくのを見ているうちに自分にも何かできないかと、結婚してからも「台所から地球が見える」と発信したり、生きもの



浅野(中静) 透(あさの なかしずか とおる)

1956年新潟県生まれ。2020年4月から森林研究・整備機構理事長、森林総合研究所所長。中静は旧姓で筆名。千葉大学理学部生物学科卒業。同大学院理学系研究科生物学専攻修士課程修了。京都大学生態学研究センター教授、総合地球環境学研究所教授、東北大学大学院生命科学系研究科教授。専門は植物生態学。熱帯林や温帯林における森林の動き、樹木の生活史、生物多様性が維持されるしくみなどを研究。第1回「みどりの学術賞」受賞。著作に『日本の森林/多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ』(東海大学出版部)など。

イルカ

1950年東京生まれ。女子美術大学在学中にフォークグループを結成、1971年シュリークスを経て、74年にソロデビュー。シンガーソングライターとして2026年で55周年を迎える。2004年IUCN(国際自然保護連合)初代親善大使に任命され21年目となった。2010年女子美術大学芸術学部アートプロデュース表現領域客員教授。2012年より生物多様性をテーマに着物のデザイン、プロデュースなどを手掛ける。ニッポン放送「イルカのミュージックハーモニー」パーソナリティ。絵本やエッセイなど著書も多数。



巻頭●対談

薪や炭として使うことを前提に管理されてきたからこそ、そこに棲める生きものがいっぱいいたわけです。

浅野 ● 雑木林も何千年という歴史があつて、ずっと薪や炭として使うことを前提に管理されてきたからこそ、そこに棲める生きものがいっぱいいたわけです。そこで人間と動物の関係がたぶん生まれてきた。それがこの数十年という短い時間で消えてしまいました。イルカ ● もったいないですね。せつかく自然と共に生きる知恵があつたのに。浅野 ● 森の他の価値を知ってもらえると、少しは変わるかなという気はしています。人間

が進化してきた長い歴史を考えると、森だったり草原だったりそういうところで上手に生きてきた歴史の方が圧倒的に長くて。わずかここ百年とか数十年間に、人類は新しい生活を試み始めているだけなわけです。イルカ ● 浅野さんは、長いこと人の手が入っていない森の研究を続けているそうですね。浅野 ● 原生林・自然林の調査を続けています。人の手が入らないと変化がないと思われ、森もどんどん変わっていくんです。いちばん動きが激しいのは子どもの木です。毎年どの木もタネをまらせるわけではなくて、年によつてはタネをつけない木もいっぱいあります。たとえばブナは4〜6年にいちどたくさん実をつけますが、他の年はほとんど実らないという周期があつて、それで実った次の年はだーっと芽生えますが、それもあつという間に死んでしまう。そんなことを何百年も繰り返しています。でもブナ自身は200〜400年ぐらい生きますから、その長い時間の中ではうまく育つ子どもがいて、それが次の世代を担うわけです。じつは人間はそういう木の性質を上手に使つて林を造っています。広葉樹はなかなかうまく森になつてくれないのですが、長い時の流れの中で森林がどういうぐあいに生まれるのか？ ブナの原生林は4000年ほどの間ずっとブナが主役だったと言われますが、1本の木の寿命は200年とか400年なので、少なくとも10世代や20世代は生死を繰り返してきているわけです。そうした基本的なメカニズムを知りたいと思っています。

巻頭●対談

自然保護も日々の暮らしの中から捉えることが大切だということを少しでもお伝えできればと思っています。

のことを歌つたりしてきました。浅野 ● それで外務省から……。イルカ ● あとで理由を聞いたら、IUCNの活動はアジア諸国ではまだあまり知られていないので、意識を高めてもらうために親善大使を置くとういう話になって、いろいろリサーチしたらいいんです。それなら聴衆に直接語りかける機会の多い歌手がいいだろうと、生きものの歌をつくつて歌つて「イルカ」っていう人間(笑)がひっかかった。浅野 ● 名前もよかつたんですね！イルカ ● 大学のフォークソング同好会時代についたニックネームなんです\*……:それでお声がけいいただいて、お引き受けしました。自然保護も日々の暮らしの中から捉えることが大切だということを少しでもお伝えできればと思っています。浅野 ● 自然を守るためのことさらの活動ではなくて、自分たちの暮らしに密着した問題として考えていくということですね。イルカ ● 親善大使になる前の話ですが、大分県の宇目町(現・佐伯市)という林業の町から中学校\*の校歌を作つてくれと依頼されたことがありました。子どもの数が少なくなつて、3つの中学校をひとつに統合して木造校舎を新築したんです。その新校舎が完成したので、校歌も新しくしたいと。そこで町に何度も通つて、「この町の自慢はなんですか?」と聞くと、大人はみんな「水と空気ぐらいしかなくて……子どもに林業を継がせるのは可哀想で」つて言うんですね。水と空気がいし

に。で、子どもたちに聞いてみると、「水や空気は自慢だけど、どこにでもあるから、自分たちも当たり前だと思つて生きてきちゃつた」つて、大人よりしっかりしたことやうんです。そこで「いつでも傍にあつたから気付かず育つたけれど……」で始まる歌詞の校歌を作りました。宇目はいまユネスコエコパーク(生物圏保存地域)にも指定されて、その自然が評価されています。そして、なによりもうれしいのは、その学校の卒業生から地元林業に携わる人も現れたことなんです！浅野 ● いま若い人たちが伐る木は、お父さんやおじいさんが植えた木ですね。祖父の時代は林業も盛んでみんな一生懸命に木を植えて、それから50年が経つて社会も大きく変化して、昔は高く売れた木がいまはなかなかいい値では売れなくなり、林業は大変な時代を迎えていると思います。それでも森には変わらない価値というものがあつますね。イルカ ● 時代がいくら変わつても、人間が感じる木の良さは変わらないと思うんです。宇目の方々とおつきあいの中で、あえて節ありの木材を買わせていただいて、それを使つて建てた家に住んでいます。木の家は快適ですね。これからの世の中は、ますますそういう方向にいくんじゃないでしょうか？浅野 ● 私もそう思います。森林には、精神的な健康や肉体的な健康を高める機能もあつて、検証研究も行われています。森の中で生きものを見ることが、子どもの想像力を豊かにすると思つています。イルカ ● 忙しい日々が続くと緑を見るだけで

◎イルカさんの本



『ここは私の学校』(祥伝社) P.231~242に校歌づくりと宇目の人たちの交流について書かれている。



\* Key Words 佐伯市立宇目緑豊中学校 2003年4月に大分県の旧宇目町にあった木浦中学校、小野市中学校、重岡中学校の3校が統合して開校した。地元産のスギを使った木造校舎(左写真)が魅力的だ。写真提供=佐伯市立宇目緑豊中学校

\* Key Words イルカさんの名前の由来 フォークソング同好会の帰り道、狭い路地を歩いている皆が持っているギターケースがゆらゆら揺れているのを後ろから見て「イルカの群れみたい!」と言つたことをきっかけに、翌日から「イルカつて言つた子でしょ」と、イルカと呼ばれるようになった。

\* Key Words IUCNとWWF IUCN(国際自然保護連合)は、1948年に設立されたスイスに本部を置く国際的な自然保護ネットワーク。日本は1978年に環境庁(現・環境省)が加盟、その後1995年に国家会員となり外務省がその窓口をつとめる。WWF(世界自然保護基金)は、1961年に設立された環境保全団体。



巻頭●対談

## 昔の人たちが経験の中で感じてきたことを、サイエンスの言葉で語るのかなと思っています。

**イルカ**●すごい膨大な時間が必要ですね。いつも同じ森を観察されてるわけですね？

**浅野**●そうです。同じ場所で見ていると動きがわからないので。ただ我々は数十年しか生きられないですから。研究者も大体30年か40年ぐらしか研究できませんので、自分の調査の最終結果を知ることができないかもしれないというジレンマもあります。

**イルカ**●江戸時代の頃に残してくれた標本が保存されていて役立つという話を聞いたことがあります。そうやってずっと長いこと続けていくことが大切なんですね。

**浅野**●スギやヒノキも最低でも40年ぐらいう育つて利用します。大きい木になると100年ぐらいう育つた木を使うわけです。ですから、あと何年経ったらこの木は使えるようになるのかを知らないといけません。植林した木は40年後、50年後に幹がどれくらい太るのか、間伐をしたらどう太さが変わるか、そういうことを何十年もかけて調べている研究者もいます。土壌が違ったり気候が違ったりすれば成長速度も変わりますから。九州は成長が早いですが、東北はやはり遅いんです。

**イルカ**●阪神淡路大震災の時にあるお寺さんの本堂が焼けてしまっただけで、その本堂の柱が奈良時代に伐られた木だったんです。柱の周りには焼けたけれど、中は焼けてないということで、ピアノを学校に寄付するために使いたいと、地元の方々が柱を輪切りにして絵やメッセージを描いてチャリティオークションをすることにになり、そのときお声がけいただいて、輪切りの木を送って下さったのですが、その

年輪がものすごく細かい。びっちりでした。

**浅野**●昔は年輪の細かい木がありましたね。いまはそうした木材を入手しにくくもなかなか難しい。長い年月ゆつくり育つた天然木でないと細かい年輪にはなりません。

**イルカ**●樹齢500年ぐらいうって言ってましたが、じつに神々しいくらい年輪でした。

**浅野**●スギやヒノキは、1000年以上生きますから昔はそういう木ばっかりだったんじゃないかな。

**イルカ**●神社にご神木がよくありますが、近くに立つと自分がちっぽけに思えますね。

**浅野**●木とつきあっていると、こんなにも長く生き続けるものと一緒に仕事をしているんだって、つくづく感じることもあります。屋久杉が2000年とか3000年と言いますが、人間は100年生きられるか生きられないかです。木とは比べものになりません。そんな相手を上手に使うには、その長く生きてもものの気持ちとかいうか、どういうふうに彼らが生きてきたのかということをよく理解してあげないと、うまく育てることも使うこともできないだろうと思っています。

ところで、いま森林総研では基礎的な研究のほかに、木を原料にお酒を造ったり、国産トリュフの栽培技術を確立したり\*、森で健康になつてもらうような研究も幅広く行っています。そうしたさまざまなことを産業化することで、地域を元気にしたいと考えているんです。林業ならぬ森業もりごうといえますか。

**イルカ**●トリュフ大好きです！ 木のお酒！どんな味がするんでしょう？ 森には、いろ

んな可能性がたくさん詰まっていますね。森の恵みを中心に暮らしを巡らすヴィレッジがつくれたなら最高です。夢が膨らみますね。

**浅野**●そうした森業も、長い時間の中で森がどう生まれて、どう変化していくのかをしっかりと考えた上で、木が生きる長い時間の中のひとときを借りて使っていくわけで、いろいろ課題も多いところです。

**イルカ**●専門家の先生方が研究して下さることで森の間口が広がっていくわけですから、そこは大いに期待しています！（笑）

**浅野**●それと、これからますます切実になる気候変動の問題もあります。50年前に植えた木をいま伐ることはできませんが、これから植える木は大丈夫なのか？ いま変化が激しくて、木は植えたら50年その場から動けないので、そこで育ちきれぬのか心配なんです。

**イルカ**●世界は4〜5年でも大きく変化していますね。それでも人間も自然の中で生かされている生きものだとすることに変わりはないわけで。私なんかもう自分の本能に逆らわずに生きたいと思ってるんですけどね（笑）。

**浅野**●森を出て2本足で歩き始めたとはいえず、私たちは何百万年もの時間を森の木々と共に生きてきたわけです。それがたかだかここ数十年間で激しく生活を変えてきて、いろいろ取り繕いながら新しい世界を創ってきています。この短い時間で、どうやって生きやすい世界を見つけて出すのかなと考えると、生易しいことではないという気がしてしまいます。おっしゃるように、本能とか心地良いと感じることを信じてやっていく方がむしろ正

解かもしれません。

**イルカ**●人間も、植物も、動物も鉱物も、みんなこの大きな地球という生きものの細胞同士なんだって私は考えているんです。

**浅野**●繋がってますからね。人間は人間だけで生きてるわけではなく、食べものは生きものですし、みんな繋がってますね。いまの科学技術には、確かにそうした繋がりがなくなっても人間が生きていけるかのような錯覚をさせてしまうようなところがありますね。

ちなみに、森林総研が創立した120年前というのは、日露戦争が終わった年なんです。ポーツマス条約ができた頃です。

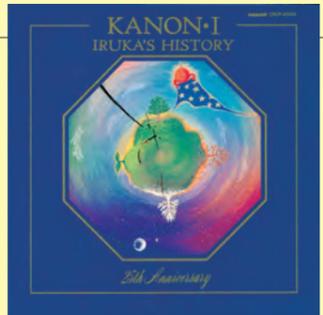
**イルカ**●創立のきっかけは何だったんですか？

**浅野**●林業の研究は産業的に現在よりずっと重要だったので、産業としてのサイエンスが必要だったのでしよう。その時代の人たちは、江戸時代から続く林業の営みや、洪水を防いだりする森林の働きについて、おそらく感覚的な理解を持って森と生きていた。森林総研がやろうとしているのはそうした昔の人たちが経験の中で感じてきたことを、サイエンスの言葉で語ることかなと思っています。特に大事なものは長い間の変化ですね。一番サイエンスにしにくい部分でもあります。

**イルカ**●これから先、やり続けていくことがやはり大切ですね。いろんな幅広い可能性があつて私たちが恩恵を直接受けられるような研究をされてきていることも、今日初めて知りました。より多くの人に、もっと知ってもらうことが大事かもしれないですね。



**\*Key Words**  
**木の酒、国産トリュフ**  
木の酒は、森林総研が開発した木材加工技術を使ってセルロースから製造されたお酒。スギ、シラカバ、ミズナラ、クロモジの4樹種で安全性を確認し、民間への技術移転を進めている。  
国産トリュフは2022年に国内で初めて人工的な発生に成功し、人工栽培技術の確立に向けて試験中。



奈良時代の木の輪切りにイルカさんが描いた絵  
1996年発売のアルバム「KANON」のジャケットにも使用された。



◎浅野所長の本  
『日本の森林/多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ』(東海大学出版部)

巻頭●対談

## それでも人間も自然の中で生かされている生きものだという事には変わりはないわけで。